



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「三人の聖者 ラーマクリシュナ①」

インドは聖者だらけの輸出生産国である。

では、聖者とは何者か。

とりあえずは、インド好きな読者諸氏が「心酔する人が聖者である」と定義しておこう。

ある人がサイババは聖者だというなら、そうだろう。また、ある人が和尚ことラジネーシこそ聖者だというなら、そうだろう。

(わが輩は、ふう～ん、そうかい、と言うだけだ)

そんな風に鼻で笑うなよ、と言う読者もいるだろう。

「それなら、あんたにとっての聖者は誰だ」

と反問されるちがいない。

わが輩が関心をもつ聖者は多々いる。多々いるということは、篤い敬意は払うが“心酔”にはまだ至っていない、ということである。わが輩は常に未熟なのである。

さて、質問の一部にお答えしよう。

とりあえずは、最近ご縁のあった三人の名前を挙げておこう。ラーマクリシュナ、ガンディー、ラマナ・マハルシである。

インドに関心ない方は、ガンディー以外の名前をご存知ないかもしれない。

ラーマクリシュナは知らなくても弟子のヴィヴェーカーナンダは知っているかもしれない。(知らないよ) それなら岡倉天心はどうだ? (それなら聞いたことがあるかも・・・)

ヴィヴェーカーナンダと岡倉は深い親交があった。岡倉の影響で横山大観、菱田春草が渡印している。

余談だが、わが恩師哲学者Sは昭和19年に『岡倉天心』(新潮社)を上梓している。Sは「日本文化の世界史上の地位を明らかにした」と岡倉を絶賛している。どういうわけかタゴールについての記述はあるもののヴィヴェーカーナンダについては無い。

Sはヴィヴェーカーナンダの哲学に興味がなかったのか、それとも知らなかったのか、今となっては知る由もない。

ヴィヴェーカーナンダの師がラーマクリシュナである。

貧しいバラモン家に生まれたラーマクリシュナは、その風体からすると、ただの“おじさん”のように見える。この容姿にこそ、ラーマクリシュナの魅力が隠されている。

いいや、わが父を想起させる。写真をじっと見ていると、何故かわが輩はオヤジを思い出すのである。似ていると感じるのだ。

今回は21年ぶりに、ベンガル州の農村にあるラーマクリシュナの生誕地を訪れた。再び

“オヤジ”の故郷を訪ね、その子孫に再会した。まだ生きていたのである。その感動を次回お伝えしよう。

また、大阪は「ラーマクリシュナ派」、東京は「ヴィヴェーカーナンダ派」が、何故多いのかについても言及しよう。